

序

昭和十二年十一月三日、小林秀雄先生還暦の壽を迎へらる。

茲に還暦を祝賀して門人有志「小林教授還暦記念史學論叢」を編纂し、先生が多年我が史學界に盡瘁せられし業績に對し、感謝の微意を表することになつた。幸に本邦史學界の諸家を首め、先生門下の諸兄の熱誠なる贊助を得て、こゝに發刊を見るに至つたことは、寔に感激に堪えぬ次第である。

先生には、ギリシヤ・ローマ史及び西洋史學史に御造詣深く、ボードン・ランケ、ペロツホ・ラムプレヒト、ウエーバー、クロチエ等の學説を批判検討せられて世に問はれ、更に龐大なるベルンハイムの「史學研究法」の全譯を、また最近に於いてはグレイブナーの「民族學研究法」の翻譯を斯

界に贈らんとしておられる。誠に十年一日の如く孜々として研鑽を續けられ、還暦の齡を迎へて益研學に勵精せられつゝあることは我々の等しく感佩仰慕するところである。

また一面立教大學に史學科の創設せらるゝや、自ら史學科長の職に當られ、爾來今日に至るまで銳意後進の指導鞭撻に力められ専ら斯學の發展充實のために努力を惜まれざるのみならず、立教大學史學會々長として其の業務を綜攬せられ、機關誌「史苑」創刊以來之に眞摯なる御研究の成果を發表して居られる。立教大學史學會が能く堅實なる進歩をとげて今日の隆盛を見るに至り、「史苑」が本邦史學界に確固たる地位を占むるに至つたのも、是れ偏に先生の多年に亙れる御盡力の賜であると云つても決して過言ではない。

爰に先生の我が史學界に於ける篤實なる御業績を不朽に頌すために、本論叢を先生に捧げ斯界に贈ることになつた。

先生また本書の成立の趣旨を諒とせられ、之を御嘉納下さらば幸甚の至りである。

昭和十三年一月

小林教授還暦記念史學論叢

編纂委員

磯	宮	手	駒	十	岡	柴
江	本	塚	井	河	田	田
	馨	隆	和	佑	太	亮
壽	郎	義	愛	貞	郎	